■論　文

日本社会主義者からの決議と書簡・再論

――コミンテルン創立大会とリュトヘルス

山内　昭人

はじめに――コミンテルン創立大会で採択された決議
1　メイデー決議とシベリア出兵反対書簡
2　文言の改変
3　文言のさらなる改変
おわりに

はじめに――コミンテルン創立大会で採択された決議

今から100年前，1919年3月2日にモスクワで国際共産主義会議が開催され，途中3月4日の会議で緊急に第3インタナショナル創設への動議が出され，それが可決されて会議は共産主義インタナショナル（コミンテルン）創立大会に切り替わった。最終日の3月6日に雑件が扱われた際，（ニューヨークからモスクワへ向かう途中で託された日本社会主義者からのメッセージを密かに携行してきた）オランダ社会主義者S. J. リュトヘルスによって動議が出された。「それは新聞雑誌での以前の公表物に依拠した議案であり，その中で日本社会党が日本軍のロシア派遣に反対であることを表明してい」た。決議文案がリュトヘルスによって読み上げられた。そして議事録は「採択／承認された」の代わりに，以下の文で結ばれている。「事務局はこの議案への同意を依頼する。これは日本の同志にとって困難な状況にもかかわらず革命的仕事にさらに献身するための激励となる」[(1)]。

採択された当の決議は日本社会主義者からの書簡と決議の2つから成っており，前半の1918年7月19日の書簡「ロシアの同志へ」は，1920年にペトログラートで刊行されたドイツ語版議事録には収録されず，1933年のロシア語版議事録に『プラウダ』1918年9月27日号からの転載で初めて収録された[(2)]。そのロシア語版をA. ヴァトリンとW. ヘーデラーは改めてドイツ語訳して再録している。しかし，後述するルガスピ（РГАСПИ）のコミンテルン創立大会関係ファイル中に両方のド

(1)　W. Hedeler/A. Vatlin (Hg.), *Die Weltpartei aus Moskau. Der Gründungskongress der Kommunistischen Internationale 1919. Protokoll und neue Dokumente* (Berlin, 2008), 207-209.

(2)　*Первый конгресс Коминтерна. Март 1919 г.* (Москва, 1993), 165-166 ; *Правда,* No. 208, 27.IX.1918, 1.

イツ語版のタイプ原稿があり[3]，後半の1917年のメイデー決議の元原稿は，そのタイプ原稿であることは間違いない。ヴァトリンらは前半の書簡を再録するに際して，なぜドイツ語のままのタイプ原稿を使わず，新たに訳し直したのだろうか。しかもロシア語版もドイツ語タイプ原稿も「1917年5月1日」となっている日付を，ヴァトリンらはわざわざ誤って1918年に訂正してしまっている[4]。ヴァトリンらが誤ったというよりはむしろ誤りやすい背景があったと言うべきであろう。それとも関連して実は，日本からの決議と書簡は最初から紆余曲折があったのであり，その事実経過をたどり，当事者たち（とりわけ片山潜と彼をサンフランシスコからニューヨークへ呼び寄せ，彼のアメリカ・レフトウィング運動への参加を手助けしたリュトヘルス）の関与とその思惑を考察することが本稿の眼目である。

ここで研究史について略記しておくと，本テーマはかつて1960，70年代を中心に研究の盛んな領域だったが，ここ30年にわたって低調である。史料（編注も含めて）では村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第1巻（大月書店，1978）および『資料集　コミンテルンと日本』第1巻（大月書店，1986）が1つの頂点に達して今日に至っている。また本稿に最も近い研究では原暉之『シベリア出兵――革命と干渉1917-1922』（筑摩書房，1989）がある。私は「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル」の連載の中で1995年に第Ⅷ篇の1章を割いて本テーマについて論じている。残念ながら，それへの反響も含めて後続の研究が出ていない[5]。

今回，その再論をまとめることになった主な理由は，以下の通りである。①拙著『リュトヘルスとインタナショナル史研究――片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング』（ミネルヴァ書房，1996）の続編の完成を目下私はめざしており，そのクライマックスとしてコミンテルン創立大会でのリュトヘルスの活躍を描くため，改めて本テーマでの研究の深化をめざしている。②ソ連邦の崩壊後，コミンテルンの一大史料群がモスクワのロシア国立社会-政治史文書館（通称ルガスピ）で閲覧できるようになり，私の続編はそれら未公開史料を活用しており，本稿でもその一端が示される。③ルガスピの史料を踏まえて（今日コミンテルン研究の第一人者と目されている）ヴァトリンらによってコミンテルン創立大会議事録の定本にふさわしい史料集が2008年に公刊され（注（1）参照），そのため上記村田編訳書の編注も補正される必要が出てきた。④片山がアメリカで編集・出版した『平民』13号が田村貞雄によって本誌2008年7月号に写真版で公表されたことで

(3)　РГАСПИ, ф. 488, оп. 1, д. 9. それをもとに1921年のハンブルク版議事録も刊行されている。*Der I. Kongreß der Kommunistischen Internationale. Protokoll der Verhandlungen in Moskau vom 2. bis zum 19.［6.］März 1919*（Hamburg, 1921），193-194.

(4)　Hedeler/Vatlin, *Die Weltpartei aus Moskau,* 208.

(5)　山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（Ⅷ）」『宮崎大学教育学部紀要』（社会科学），79号，1995年7月，22-28．2001年にロシア語元版の資料集（*ВКП(б) Коминтерн и Япония. 1917-1941 гг.*［Москва］）が刊行されて以来，久しく待ち望まれていた富田武／和田春樹編訳『資料集 コミンテルンと日本共産党』（岩波書店）が2014年に刊行された。同訳書について，ここで触れておきたい。編訳者による「はじめに」に記されているように，同訳書は元版から資料を選択し，新規に資料を加えた独自編集によるもので，資料1は本稿で取り上げる「日本の社会主義者の挨拶と決議」である。「解題」および編注も邦語版独自のものであるが，残念ながら，資料1に関しては上記村田編訳書の注解の域を出ておらず，1995年に発表した上記拙稿も参照されていない。

新たな知見を得ることができた[6]。

1　メイデー決議とシベリア出兵反対書簡

1917年4月6日の夜，（売文社から分離した）由分社定例の社会主義座談会が堀保子方で開かれ，「ロシア革命」の題目で荒畑寒村，高畠素之，堺利彦がそれぞれ話した。そして「五月の座談会は雑誌〔『新社会』〕が後れた為め一回休みにし，其代り五月七日の夜『メーデー懇談会』を山崎〔今朝弥〕氏宅に開いた」[7]。

その「メーデーの小集」は『新社会』1917年6月号で次のように報じられた[8]。「来会者は三十名ばかり，山川〔均〕氏は簡単にメーデーの由来を述べて此会を開いた。続いて高畠，吉川〔守邦〕，山川の三氏から露国今回の事実に対し有志者の決議を露国社会党に送るの提案が出で，多数の同意を得て直ちに決議文の討議に移つた。劈頭先づ露国社会党の成功を祝し，露国革命の歴史的意義を明かにし，之に対する露国社会党並びに万国社会党の責任を力説し，同時に戦争に対する各国社会党の責任と之に対する希望を表明した決議案が朗読せられると，拍手が起つて室内は一種の緊張した空気に満された。／提案者を代表した山川氏の提案の理由と説明があつた後，一二ヶ処の辞句を訂正した上，全会一致を以て決議文を通過した。右は三名の提案者を其侭実行委員に挙げて，直に露国を初め各国の社会党団体に送達せられた筈である」。もとより決議の国内での公表など考えられず，その採択の模様を報じた同号ですら，発禁処分を免れなかった[9]。

官憲報告には，さらに以下が記されている[10]。堺と山川が会の発起者であり，「出席者全部ニテ三十四名」。「右ノ決議ハ之ヲ英訳シテ『タイプライター』ニ付シ露，英，米，仏，独，伊，和ノ各国ニ於ケル重ナル者（中ニハ出版業者ナラン歟ト認メラル丶モノアリ）ニ宛之ヲ発送スルコト丶ナシ尚其ノ不着ノ場合ヲ慮リ邦人同志タル在米片山潜，在仏石川三四郎，在瑞西守田文治（……）ノ許ニモ之ヲ送付シ同人等ノ手ヲ経テ宛名ノ向ヘ交付ノ手続ヲ為スコト丶セリ」。同報告の作成元である内務省警保局は5月11日に，「目下ノ処発送日付不詳ナリ」としながらも，決議の国外到着を警戒して外務省へ報告内容を内牒した[11]。

同決議文は官憲報告に掲げられているが，それが「辞句を訂正した上」でのものであることを確認するため，ここに「決議文案」の全文を掲げる[12]。

---

(6)　田村貞雄「在米片山潜が発行した『平民』について――総目次と発見された第13号」『大原社会問題研究所雑誌』596号，2008年7月，32-35.

(7)　堺「座談会の記」『新社会』3巻9号，1917年5月，55.

(8)　胡桃「メーデーの小集」『新社会』3巻10号，1917年6月，42；cf. 山本博雄／佐藤清賢編『冬の時代から 1908-1918』（橋浦時雄日記 第1巻）（雁思社，1983），470.

(9)　荒畑の回想によれば，「当時はそれが精一ぱいで，もとより公然とロシア革命を記念することなどは出来た訳のものではありません」。荒畑寒村「ロシア革命のころ」『世界』265号，1967年12月，181.

(10)　松尾尊兊編『社会主義沿革』Ⅰ（みすず書房，1984），489.

(11)　内務省警保局長永田秀次郎の外務省政務局長小幡酉吉宛文書，1917年5月11日付，外務省外交史料館，4. 3. 2. 1-1 (9).

(12)　永田内務省警保局長の小幡外務省政務局長宛文書添附附属書類，1917年5月11日付，外交史料館，4. 3. 2. 1-1

決議／吾人ハ千九百十七年ノ五月祭ヲ期シ茲ニ露国社会党ノ今回ノ革命ニ対シ甚深ナル同情ヲ表ス／露国革命ハ中世ノ専制政治ト現時ノ資本家制度ニ対スル革命ヲ一斉ニ行ハントスルモノト認ム露国社会党，欧州交戦国カ直ニ戦争終結及一歩ヲ進メテ社会主義的革命ヲ徹底センコトヲ望ミ敵国ニ於ケル自己階級ニ向ケツヽアル銃剣ヲ採テ共同ノ敵タル自国ノ資本家階級ニ対シテ戦ハンコトヲ望ム／吾人ハ露国社会党，各国同志ノ勇敢ナル健闘ヲ望ム／千九百十七年／日本社会主義団臨時実行委員

訂正箇所は下線で付した箇所である（厳密には，「終結」も「終局」に変わっている）。つまり，「堺利彦ノ意見ニ依リ『一歩ヲ進メ』トアルヲ『更ニ歩ヲ進メ』ト訂正シ」また，「銃剣ヲ採テ……戦ハン」が「闘争カ……向ケラレン」と修正された。いずれも文章推敲上の問題だった。

荒畑は後年，次のように回想している[13]。「代表者は堺さんの名前でロシアに電報を送ったんです」。それから在米の片山潜にも電報が打たれた。「これ〔片山の『わが回想』に引用された後述の決議〕はだいぶパラフレーズしてありますね，もっと短い。電報ですからもっと短い」。

果たして片山には電報で短い決議文が送られたのだろうか。『平民』12号（1917年8月）に載った堺の片山宛書簡には，次の1文がある[14]。“We sent you a copy of our resolution that we sent to the Russian Socialist Party.”その英文決議はさっそく『平民』11号（1917年6月）の英文欄に掲載されたというが，同号が未発見のためその異同の照合はできない。がしかし，『インタナショナル・ソーシャリスト・レヴュー』同年8月号にそれが載っており[15]，情報源は片山しか考えにくいばかりか，後述する片山自身の証言もあるので，それが日本から送られたものと同一であることは間違いない。

さらに『平民』13号（1917年10月）には，和文決議が改めて載ったのだが，それが遅れて掲載されるに至った経緯が前号に記されていた[16]。「吾人は不幸にして之を郵送中紛失した今下手の訳文を載するより原文を取寄せて載せん」。一度は12号に英文から日本語に訳し直したものを載せるつもりにしていたものの，日本文全部の原稿を紛失したため，上記のように決議原文を取り寄せることになった。これまで和文決議が載った13号が未発見だったため実見できなかった。けれども，片山潜の『わが回想』に再録され，一足早くそれに依拠してその公刊前に山辺健太郎によって公表された和文決議が，山辺が記すように「これがもとのものと思われる」とするならば，決議文は日本からの送付前に書き直されたことになる（1パラグラフまるまる挿入された上，全体で約2倍半の字数にふくらんでいる）[17]。

上述のように近年，同13号が発見・公表されて実見できたその和文決議は，細部の異同が散見

(9)；次頁に掲げる表「日本社会主義者団1917年メイデー決議各版一覧」中のNo. 1（以下，表No. 1のように略記）。

(13) 荒畑寒村「革命六十年 砂礫多き道」『思想』642号，1977年12月，58-59.

(14) “From the Heimin Readers,” *The Heimin,* No. 12, Ⅷ.1917.

(15) “Jap Socialists Endorse Russians,” *The International Socialist Review,* Vol. 18, No. 2, Ⅷ.1917, 119.

(16) 「日本社会主義者の活動」「発刊の後れた理由」『平民』12号，1917年8月.

(17) 片山潜『わが回想』下（徳間書店，1967），289-290；山辺健太郎編『社会主義運動』I（みすず書房，1964），xxi-xxii.

表　日本社会主義者団 1917 年メイデー決議各版一覧

	出典	書き出し	途中	結び	日付	署名
1	過激派其他危険主義者取締関係雑件, 本邦人之部（4. 3. 2. 1-1 (9)), 外務省外交史料館 ［→『特別要視察人状勢一班』第七］	吾人ハ千九百十七年ノ五月祭ヲ期シ茲ニ露国社会党ノ今回ノ革命ニ対シ甚深ナル同情ヲ表ス	更ニ歩ヲ進メテ社会主義的革命ヲ徹底センコトヲ望ミ	吾人ハ露国社会党、各国同志ノ勇敢ナル健闘ヲ望ム	千九百十七年	日本社会主義団臨時実行委員
	『平民』11 号, 1917 年 6 月［同号未発見のため、英文面に掲載の英文決議未見］					
2	"Jap Socialists Endorse Russians," *The International Socialist Review* (Chicago), Vol. 18, No. 2, VIII.1917, pp. 118-119.	On the first of May, 1917, we, the Socialist group in Tokyo, Japan, gather together here to express our highest respect for and deepest sympathy with the Russian revolution!	Therefore, to make the progress of the Russian revolution advance the goal of Socialist revolution is not only the responsibility of Russian Socialists alone, but also really that of international Socialists.	We trust in and depend on the persevering courage and heroic fighting of Russian Socialist party and of Socialist comrades of the world. We sincerely hope for the steady spread of the revolutionary spirit!	［なし］	By the Acting Committee of the Socialist Group, in Tokyo, Japan.
3	『平民』13 号, 1917 年 10 月, 1 面 ［田村貞雄「在米片山潜が発行した『平民』について ── 総目次と発見された第 13 号」『大原社会問題研究所雑誌』596 号, 2008 年 7 月, 32 頁.］	東京に於ける社会主義者の一団は一九一七年のメーデーを期し、露国革命に対して深甚なる敬意と同情を表す。	故にロ国革命の進路を指導して社会主義の目的に向つて更に其歩を転ぜしむるは、ロ国社会党に任務にして、同時に亦各国社会主義者の責任たり。	吾人はロ国社会党と各国同志の勇敢と奮闘に信頼し社会主義的革命の成功を望む。	一九一七年労働祭東京に於て	日本社会主義者団
4	"Японские социалисты против посылки войск в Сибирь," *Правда* (Москва), No. 208, 27.IX.1918, стр. 1. ［*Центросибирь* (Вехнеудинск), No. 30, 14.VIII.1918 からの転載］ ［→ *Первый конгресс Коминтерна. Март 1919 г.* (Москва, 1933), стр. 165-166.］	Мы, социалисты Японии, собравшись в Токио 1-го мая 1917 г., выражаем наше глубочайшее сочувствие Российской революции, перед которой мы преклоняемся. ［1917 年 5 月 1 日に東京に集まった我々、日本社会主義者は、ロシア革命に先ずは敬服し、我々の最も深い同情を表す。］	Превращение российской революции во всемирную социальную революцию есть дело не только русских социалистов, но и социалистов всего мира. ［ロシア革命の全世界的社会主義革命への転化は、ロシア社会主義者だけでなく、全世界の社会主義者の事業である。］	Мы верим в героизм русских социалистов и наших товаришей во всем мире./ Мы искренно верим в безостановочное распространение духа революции. ［我々はロシアの社会主義者と全世界の我々の同志の英雄的剛勇を信頼している。/ 我々は革命精神の絶え間なき伝播を衷心から確信している。］	［なし］	Исп. Ком. Соц. Группы Токио. ［東京社会主義団執行委員会］
5	Resolution der japanischen Sozialisten [typed mss.], in: РГАСПИ, ф. 488, оп. 1, д. 9. ［→ *Der I. Kongreß der Kommunistischen Internationale. Protokoll der Verhandlungen in Moskau vom 2. bis zum 19.［6.］März 1919* (Hamburg, 1921), S. 193-194.］	Wir, Sozialisten Japans, versammelt in Tokio am 1 Mai 1917[,] entbieten unsere tiefste Sympathie der russischen Revolution[,] die wir mit Bewunderung verfolgen. ［1917 年 5 月 1 日に東京に集まった我々、日本社会主義者は、我々が感嘆して見守っているロシア革命に、我々の最も深い同情を伝える。］	Die Umwandlung der russischen Revolution in eine Weltrevolution ist nicht nur Sache der russischen Sozialisten[,] es ist dies die Aufgabe der Sozialisten der ganzen Welt. ［ロシア革命の世界革命への転化は、ロシア社会主義者だけの事業ではなく、それは全世界の社会主義者の任務である。］	Wir halten den Glauben aufrecht in den Helden-mut der russischen Sozialisten und unserer Genossen in der ganzen Welt. ［我々はロシアの社会主義者と全世界の我々の同志の英雄的剛勇を毅然として信頼している。］ ［末尾の 1 文脱落］	［なし］	Der Vollzugs-ausschuss der Sozialistischen Gruppe Tokio ［東京社会主義団実行委員会］

するものの片山，山辺の公表分と同一であり，表 No. 2 の英文とも内容は重なる。ということは，先に電報が打たれたのではなく，英訳して送付する際に No. 1 も加筆して No. 3 にしたことになる。

その加筆された No. 2, 3 をコミンテルン創立大会での決議文とも，またそれ以前の表 No. 4, 5 とも比べて日付の有無や翻訳次元を超える問題があるのは明らかである。その点に関連して村田陽一は「リュトヘルスに託するさいに加筆されたものと推定される」と記しているが[18]，加筆はすでになされており，実はそれとは別の改変の問題があった。それについては次章で論ずるとして，もう 1 点，極めて念入りに幾重にも送付が試みられたその決議は，果たしてロシアに届いたのだろうか，についてみておくことにする。

このことに関して片山は，1917 年 9 月 30 日付堺宛書簡で次のように記した。「露国革命に対する日本社会主義者の決議はモスコウの国民大会に報告されたと当地の新聞紙は伝へてゐる。あの決議は少くとも『平民』『インタナシヨナル・ソーシヤリスト・レヴユウ』及『ニューインタナシヨナル』に出て露国へも行つて居るから，兄等の送られたものも届いているに違ひはない」[19]。

確かに，当時直接ロシアに届き，それをペトログラート・ソヴェトが受け取ったという事実だけは以下の記事で確認できる。が，特に注意がそれに払われた形跡は今のところ確かめられない。つまり，ロシア語日刊紙『ノーヴイ・ミール』（ニューヨーク）8 月 25 日号で報じられた「ペトログラート，8 月 23 日」発の短い記事で，全文はこうである。「ペトログラート労兵ソヴェトによって，日本社会党中央委員会からの歓迎の書簡が受け取られた。ちなみに，本書簡の中には『ロシア革命は全世界の刷新と再建の始まりにすぎない』とある」。一日早く 24 日のイディッシュ語日刊紙『進め』（ニューヨーク）にも同内容の外電が載り，それは翌 25 日の『ニューヨーク・コール』に転載された[20]。

このメイデー決議を 1 年数カ月後に直かにモスクワの同志に手渡したのが，リュトヘルスである。彼は 1918 年 7 月 19 日に敦賀港からウラジヴォストークへ向けて横浜駅を出発する際，見送る山川，杉山正三らから同決議を東京横浜社会主義者団実行委員会の書簡「ロシアの同志へ」とともに託された[21]。それらを干渉戦争下のロシアへ持ち込んだリュトヘルスは，シベリア横断中それらの紛失・押収を危惧して途中で各機関紙への掲載に努めた。それらの掲載を追っていくことにしよう。

ウラジヴォストークの労働組合中央ビューロー機関紙『ラボーチー・イ・クレスチヤーニン〔労働者と農民〕』1918 年 7 月 28 日号に，ソヴェト・ロシアへの干渉に反対する書簡「ロシアの同志へ」が掲載された[22]。現物は未見で，転載物を見る限り，メイデー決議がその後に続かなかったよ

---

(18) 村田編訳『コミンテルン資料集』，601.

(19) 片山潜「紐育」『新社会』4 巻 3 号，1917 年 12 月，43. なお，3 番目の『ニュー・インタナショナル』誌掲載も事実とすれば，それは筆者未見の 6 号（6 月 30 日）であろう。

(20) “Японские социалисты приветствуют Совет рабочих и солдатских депутатов,” *Новый Мир*, No. 1078, 25. VIII.1917, 1；“Japanese Socialists Greet New Russia,” *The New York Call,* Vol. 10, No. 237, 25.VIII.1917, 3.

(21) 松尾編『社会主義沿革』，697, 702. なお，リュトヘルス側の史料では，7 月 21 日晩に横浜駅発，7 月 23 日にウラジヴォストーク着とのわずか 2 日の行程だったとある。官憲報告との間にある 2 日の隔たりは，依然解けない疑問である。山内「片山潜の盟友リュトヘルス（Ⅵ）」，17-18.

(22) *Рабочий и крестьянин,* No. 3 (11)，28.VII.1918, reprinted in：*Борьба за власть Советов в Приморье（1917-1922）*（Владивосток, 1955）, 177-178；cf. 原『シベリア出兵』，398.

うだ。なお，同書簡の，メイデー決議も送るとの末尾の文はそのまま転載されているものの，メイデーの年が削られており，編注でわざわざ1918年のそれだと誤って記されている。

続いて1918年8月14日発行のツェントロシビーリ（全シベリア・ソヴェト中央執行委員会；イルクーツクで開催された第1回全シベリア・ソヴェト大会の決定により1917年11月6日に発足し，ひと月足らずして同市で政権樹立を宣言し，以後シベリアおよび極東の各ソヴェトの統括機関となっていた）の機関紙『ツェントロシビーリ』30号に両文書が掲載された（表No. 4）。実は，30号自体が緊迫した状況下での刊行だった。というのは，ツェントロシビーリが（西からチェコ軍団と白衛軍がイルクーツクをめざしてなだれ込もうとしていた）7月10日にイルクーツクを撤退し，本拠を東方のヴェルフネウジンスクに移すのに先だって7月4日に『ツェントロシビーリ』編集部は移り，さらに（バイカル湖の南岸と東岸での攻防戦の結果）8月16日にツェントロシビーリがチタへ撤退を余儀なくされるのに今度は遅れて18日まで同紙はヴェルフネウジンスクで刊行され，20日夜の陥落時に同編集部はチタへ移り，そして28日にツェントロシビーリが解散し，パルチザン闘争へと転ずることを決定した際，同紙の刊行も停止することになったのだから[23]。

その掲載は日本官憲の知るところとなり，全訳されて報じられている[24]。

なお，従来から『特別要視察人状勢一斑』（注（24）参照）に拠って，1918年10月1日の『イズヴェスチヤ』にも日本からのメッセージが掲載されたかのような記述があるが，それは誤りで，「ニューヨークから日本，シベリア，チェコ-スロヴァキア〔戦線〕経由モスクワへ」の題が付けられたリュトヘルスら一行（離日直前のリュトヘルス夫妻と合流した，共にアメリカ社会党ロシア人連盟員であるA. メニショイ〔本名Л. レヴィン〕とM. ミヘリソンを加えた4名で，本文中ではアメリカ社会主義代表団と自称する）のシベリア横断を中心としたインタヴュー記事であった[25]。日本に関する記述は少なく，官憲訳の3パラグラフ程度だが，後半の訳は全く別物で，他の報告が紛れ込んだようだ。重要と思われる箇所だけ訳し直しておくと，こうである。「東京で同志たちによって日本社会党との関係を結ぶことに成功した。代表団の列席で日本の同志たちの会合がもたれ，そこでソヴェト政権支持に関する決議が採択され，ロシア問題への干渉に反対する抗議が表明された」。「日本社会主義者はアメリカの同志たちに，ロシア革命の日本労働者大衆への影響は巨大である，と語った」。いずれも問題のあるリュトヘルス発言であった（次章に続く）。

1918年9月25日にリュトヘルス一行はモスクワに到着した。翌々日の『プラウダ』に同書簡と決議が「まえがき」付で載った。『ツェントロシビーリ』版は未見だが，『プラウダ』版の「まえがき」の最後に『ツェントロシビーリ』30号の注記があり，また上記官憲訳文との重なりが一部ながらあることから，両者は同一であるとほぼ断定できる。

---

(23) А.Л. Посадсков, *Сибирская книга и революция 1917-1918* (Новосибирск, 1977), 228；cf. 原『シベリア出兵』, 401.

(24) 松尾編『社会主義沿革』, 695-697. ただし，「最も反動的な国家」を「最も保守的ナル国家」と，「社会革命」を「社会改革」とそれぞれ訳すなど，一部に偏向的な面があった。

(25) “Из Нью-Иорка – через Японию, Сибирь и Чехо-Словакию – в Москву (Беседа с тов. Рутгерсом),” *Известия*, No. 212 (476), 1.X.1918, 2. 市販されているマイクロフィルムの当該箇所は写りが悪く，そのせいもあってか官憲訳の問題点が指摘されてこなかった。私は写りがましなアメリカ議会図書館のマイクロフィルムを利用した。

2　文言の改変

リュトヘルスに横浜駅で託された書簡が『ラボーチー・イ・クレスチヤーニン』掲載まで約1週間の間にロシア語訳されたわけで，それにはリュトヘルスに同行したメニショイとミヘリソン（とりわけ『ノーヴイ・ミール』の元編集員でもあった前者）の関与が推定される[26]。

続いて，『ツェントロシビーリ』版に掲載されたメイデー決議も「リュトヘルスに託するさいに加筆されたものと推定される」のではなく，メッセージを受け取った後，それをロシア語訳しなければならない，まさにその過程で或る思惑が入り込む余地が生じ，その結果，改変されたのではないだろうか。

もともとメイデー決議は「露国社会党」宛であったのだが，少なくとも『ツェントロシビーリ』版以降では「社会党」の表現は一切消えて「ロシア社会主義者」となった。日本社会主義者にとっては当時，ロシア社会民主党内のボリシェヴィキとメンシェヴィキとの相違・対立への認識は乏しく，その認識を経ない従来からの「露国社会党」という表現だったのだが，10月革命後にそれを受け取ったボリシェヴィキ側にとって，「社会党」の表現は，すでに分裂していた事情から不都合が生じやすい。それを避けるための思惑があって，「社会党」が一般的な「社会主義者」の表現に変えられたのではなかろうか。

『ツェントロシビーリ』に掲載されるにあたって，両文書の前にほぼ同分量の「シベリアへの軍隊派遣に反対する日本社会主義者たち」と題する「まえがき」が付された。その内容を紹介すると，まず，日露戦争時の日本社会主義者による反戦行動の記憶を呼び起こし，そしてその後の弾圧のうち「幸徳事件」を特記し，弾圧の苛酷さをツァーリ時代以上だ，とした。けれども，冬の時代に生き続けた少数の社会主義者グループのうち東京と横浜のグループが統一行動を起こした最初のものが，以下の書簡である。彼らはシベリア出兵に反対している。「彼らはボリシェヴィキの見解に立っている」。「最も反動的な国家の社会主義者たちが全世界革命という重要な問題に対して自らの見解を明瞭かつ正確に規定していること」，さらには「ブルジョワ新聞雑誌のあらゆる嘘にもかかわらずボリシェヴィズムの思想が日本の労働者にこのような強大な影響を与えたこと」を，我々は大いにうれしく思う，と。

下線部の理解は，日本社会主義者の当時のそれを明らかに超えていた。その論証のためにも，「ボリシェヴィキ文献とアメリカ」で試みたのと同様の「ボリシェヴィキ文献と日本」といった文献史的アプローチにもとづく考察が必要だと私は考え，それを拙著で試みた[27]。その結果，明白となったのは，アメリカの場合と異なり，日本の場合は1917年春から2年間，思想的急進化は進まず，ましてや組織的な急進化へとつながっていかなかったことである。そのことについては従来，山川らがサンディカリズムの克服に時間を要したことなどの内的要因があげられるほか，この時期日本社会主義者は国際社会主義運動の局外にあった，と解釈されてきた。しかし，文献を通じての

(26)　Cf. 山内「片山潜の盟友リュトヘルス（Ⅷ）」, 4-5.

(27)　山内『リュトヘルス』, 293-318；同『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者』（ミネルヴァ書房, 2009）, 270-286.

情報はかなり入ってきていたのであり，文献史的アプローチによるアメリカとの比較によって，ボリシェヴィキ文献の「摂取」に差があったことが確かめられる。

1例をあげれば，1918年12月1日，堺と高畠は連名で「ニコライ・レーニン氏並過激派党員諸君」に宛てて英文書簡を送ったのだが，留意すべきは，それが第2インタナショナル事務局（BSI），ドイツ独立社会民主党のH.ハーゼ，ドイツ社会民主党のF.エーベルトへの各書簡とともに小包でまとめてハーグのBSIへ送られたことである。その上，本文はほとんど同文で，終戦を祝い，日本政府による自分たちの運動の弾圧への不平を述べ，「あらゆる重要なことに関してあなたがたと通信したい」と通信を請い，そして来る国際社会主義大会へ代表を送ることを申し出ていることである[28]。ここで特に問題にしたいのは，大戦終結後インタナショナルとの接触を日本社会主義者が再開するにあたって，その相手は相変わらずBSIだったということである。

日本においては例えば，第2インタナショナルから離脱しないで，そこにとどまるか，それとも来る新インタナショナルに期待し，それに参加するつもりか，という二者択一を迫る実践的要請を伴う理論には未だ達していなかった（それゆえにこそ片山ら在外日本人社会主義者の活躍の場があった）[29]。

メイデー決議は本来，社会主義革命の徹底，つまり，結果からみれば10月革命を呼びかけていたことになるのだが，「まえがき」のように「ボリシェヴィズム」に引き寄せて解釈すれば，また10月革命を成功させた時点での公表の意義を考えれば，或る方向への解釈が入り込む余地が出てくる。すなわち，決議をもう1つの書簡と同列に扱い，「世界革命」の文言までも出てくる可能性が。

かかる解釈が入り込む余地は，実際のところメイデー決議の方にしかなかったろう。というのは，「書簡」の方は「現在，我々はシベリア出兵を憤慨してみている」が，日本帝国主義政府が「諸君を脅かしている危険を防止するために十分な力を自由に使えない」と消極的反対の表明にとどまっているからである。それに対してメイデー決議は，ロシア10月革命後のさらなる発展を訳出に際して書き加える余地がある文章であった。その上，「ロシアの同志へ」向けての挨拶文扱いの書簡が先にあり，決議文が続くという体裁を一見なしており，1917年を削れば，10月革命への決議とみられてもおかしくない。

その改変を具体的に見ていくと，表No. 3の下線部「ロ国革命の進路を指導して社会主義の目的に向つて更に其歩を転ぜしむる」こと（No. 2の該当下線部も）が，ロシア社会党と各国社会党に呼びかけられていたのだが，それが『ツェントロシビーリ』版から『プラウダ』版を経てロシア語版議事録に至るまで「ロシア革命の全世界的社会主義革命への転化」（表No. 4）と，また創立大会提出用タイプ原稿およびドイツ語版議事録では「ロシア革命の世界革命への転化」（表No. 5）とまでそれぞれ一変している。かかる「世界革命」まで行きついた表現は，それこそ10月革命後のコミンテルン創立大会時の最大の関心事にまでストレートに結びつけられかねない。

以上の『ツェントロシビーリ』版の「まえがき」作成，さらにはメイデー決議の改変に対して，リュトヘルスが一役買っていたことは否めないだろう。

---

(28)　在英国臨時代理大使永井松三の外務大臣内田康哉宛機密公文書添附写及写真，1919年2月20日付，外交史料館，4. 3. 2. 1-1 (11).

(29)　山内「片山潜の盟友リュトヘルス（Ⅷ）」，25-27.

リュトヘルス自身が立ち会った東京と横浜の社会主義者の統一行動の記述は，彼からの情報なしには書かれなかったろう。その上，上述のインタヴュー記事のように，彼は自分たち代表団が列席した日本社会主義者の会合でメイデー決議までもが採択されたように潤色している。

リュトヘルスはモスクワ到着直後のインタヴュー記事でも，（リュトヘルス夫妻によって1929年9月21日から25回にわたって『トリビューネ』に連載された）「3つの戦線を通って日本からソヴェト-ロシアへ」でも決議として書簡のみを取り上げた[30]。メイデー決議を彼はそれだけを取り上げて言及することは決してなく，1935年の回想でも両者を一括したかのような曖昧さの残るかたちで「10月革命への関係について〔オランダ語版だと「10月革命についての彼らの態度表明に関して」〕彼らによって採択された決議」と表現した[31]。干渉戦争下のシベリア横断中もしくは直後のリュトヘルスにとって現下の革命の防衛・進展が急務と考えられ，それへの関心の集中がそのような一方のみへの肩入れとなったのではなかろうか。それでもなお，以下の作意は彼にはなかった。つまり，本文中の「1917年5月1日」を削除しようとすることは。

ちなみに，この時期の片山もまた，「まえがき」の下線部と似たような楽観的な見方をしていた。例えば，1918年4月の『平民』15号に片山は「日本に於けるボルシエヴイキの伝染」の題で小記事を載せているが，当時の彼はボリシェヴィズムを理論的には未だ捉えておらず[32]，「吾人は屢々主張せる如く革命の声は益々高潮を来しつゝある」と結びのパラグラフにあるように，こと日本に関しては希望的観測を含む論評を繰り返していた。

あと1つ疑問が残るのは，表No. 3の末尾「吾人は……社会主義的革命の成功を望む」の下線部である。それは英語版と見られるNo. 2とも異なり，『ツェントロシビーリ』版以降のロシア語訳文にも見られないのは，なぜだろうか？　リュトヘルスに託された英文もNo. 3と同じならば当然，ロシア語版にも反映されたはずだ。それを片山が『平民』13号に載せる際に語調を強めるためであろうか，書き換えた可能性が浮かび上がる（次章に続く）。

3　文言のさらなる改変

さらに，メイデー決議の文言が改変されて転載されていく欧米での例を見ていくことにする。

早い時期の転載紙で私が確認したのは，以下である。1918年10月9日の『トリビューネ』（アムステルダム），同月の『ドゥマン』（ジュネーヴ），12月21日の『ポピュレール』（パリ），そして1919年1月2日の『コール』（ロンドン）[33]。蘭語，仏語，英語の違いと各編注があるものの本文は

(30)　S.J. en B.E. Rutgers, “Van Japan naar Sovjet-Rusland door drie fronten. (Juli tot October 1918),” *De Tribune,* Jrg. 22, No. 298, 21.IX.1929, 2 ～ Jrg. 23, No. 16, 19.X.1929, 3；山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルス（Ⅵ）」『宮崎大学教育学部紀要』（社会科学），72号，1992年9月，17-18.

(31)　C. Рутгерс, “Встречи с Лениным,” *Историк-марксист*, 1935, No. 2-3, 88；S.J. Rutgers, “Een ontmoeting met Lenin,” *Kommunisme,* Jrg. 1, No. 11, XI.1935, 395.

(32)　山内『リュトヘルス』，115-117.

(33)　“De Japansche socialisten en de oorlog,” *De Tribune,* Jrg. 12, No. 7, 9.X.1918, 2；“Japan,” *demain,* No. 30, X. 1918, 322；“Les socialistes japonais saluent les Soviets,” *Le Populaire*, 3e Année, No. 250, 21.XII.1918, 2；“Greeting of Japanese Socialists to the Russian Soviet,” *The Call,* No. 143, 2.I.1919, 3.

同源と言ってよい（厳密には，後で述べる異同があるが）。書簡の方は忠実な転載となっているが，決議の方は半分以上が削られ，その上，署名が社会党執行委員会もしくはその省略形に変えられている。以下の分析のために，ここでは『コール』の決議文を掲げる。

> We, Japanese Socialists, have the most profound respect for the Russian revolution and we desire to express our fullest and entire sympathy towards it. The Russian revolution commenced by the rise of the bourgeoisie against the absolutism of the middle ages and has finished by the rise of the proletariat and the victory of the latter over capitalism. The Socialists of Russia and of other countries desire to do everything possible to put an end to war. It is upon the heroism of our Russian Socialists and comrades that we shall build the new world.

1番目の下線部は，もともと現在形だったものが，現在完了形に変えられている（『トリビューネ』版では過去形に）。その上，1917年5月1日の決議であることは一切明示されていない。ここまでくると，10月革命歓迎の決議と解されてしまう。2番目の下線部の文全体が途中から変えられ，誤訳と言えるほどのものになるのだが，この改変の経過を手がかりに4つの転載の順番は以下のように推定される。そもそもなぜこのような省略版が出現したかというと，『トリビューネ』の決議は「ロシア〔から〕の電報」欄に載っており，これが初出で電報による伝達だったためである。中間部の3パラグラフと末尾の一文が脱落しており，そのままで転載されていく。その上，『ドゥマン』に転載された際，末尾の「我々はロシア社会主義者の英雄的行為と全世界の我々の同志を信頼している」が，「信頼する」（bouwen op）を「建てる」と誤読し，「我々は全世界を築く」と仏訳された。そして，「全世界」がヨリ意味が通じるようにするためか『ポピュレール』版では「新世界」に変えられ，それが『コール』版に引き継がれた。

それでは，誰が『トリビューネ』へ打電したのだろうか？　1918年10月11日の『ノーヴイ・ミール』にリュトヘルス一行のモスクワ到着の一報が転載されたが，その情報源は「アムステルダム，10月9日」となっていた（さらにその元の情報源は10月1日の『イズヴェスチヤ』に載った上記インタヴュー記事であった）。その同じ9日に決議と書簡が『トリビューネ』に載ったのであり，おまけに末尾の1文が抜けていたことからも考えて，打電にリュトヘルスが関与した可能性が高い（10月28日の『トリビューネ』第1面にはリュトヘルスの「モスクワからの〔9月28日付〕書簡」が載ることになる）[34]。

なお，官憲報告によって日本で早くから知られていた1919年1月23日の『レイバー・リーダー』（マンチェスター）での英語版は，（ロシア情報の伝達を主たる目的としてソヴェト・ロシア政権から資金援助を得て，シルヴィア・パンクハーストを中心にロンドンで創設されていた）人民ロシア情報局からわざわざロシア語版の提供をうけて英訳・転載されたものであるため，上記のよ

(34)　*Новый Мир*, No. 1939, 11.X.1917, 1 ; “Brief uit Moskou,” *De Tribune,* Jrg. 12, No. 23, 28.X.1918, 1.

うな省略版ではなく，『プラウダ』版と同一である[35]。それでもなお，「1917年5月1日」だけは削られていた。1919年2月16日の『ユマニテ』（パリ）版でも同様である[36]。ということは，ロシア10月革命に対する決議として受けとめられた版が西欧に流布したということである。

アメリカでは英語版が1919年3月23日の『ニューヨーク・コール』に転載されている[37]。それは『ペトログラートスカヤ・プラウダ』版を英訳したもののようだが，表No. 4からは逸脱する英語表現が散見するし，日付もない。その英語版をもとに片山潜は1919年5月の『平民』20号に和文で1箇所だけを抄録し（というより，下記のように意訳に近い），翌月の21号に忠実に英語版を再録している[38]。その際，片山は平民11，13号に英文と和文で公刊済みであることに全く言及しておらず，わずかにまえがきで「日本の社会党は千九百十七年五月に秘密会議を開き露国革命の祝賀の意を述べて」云々と日付がわかる書き加えをしているだけである。

ここで，なぜ表No. 2の末尾の1文だけが他と異なるのか，の問題に立ち戻ることにする。『ニューヨーク・コール』の英文決議の末尾（片山が再録したのも）は，表No. 2やNo. 4とほぼ同内容である。ということは，末尾は表No. 3の「社会主義的革命の成功を望む」の英訳文にはなっていないということである。和文の1箇所の抄録はこうである。

> 「露国革命の進歩を計り之が成功を期するは露国同志のみの責任ではない，実に万国社会主義者の責任である，交戦諸国は此際直ちに敵対行為を止めて同時に其労働階級は敵国労働階級に向けて居る干戈と大砲とを一転して各自国の支配階級に向くべし，是れ実に露国同志者の責任であると同時に万国同志者の責任である」と徹底せる革命的社会主義を宣言して居る。

最後の「革命的社会主義」が鉤括弧外にあることに注意してもらいたい。括弧内にすると英文にない加筆となるからであろう。にもかかわらず，その表現に片山がこだわるのは，すでに私が仮説を立てたように，表No. 3に「社会主義的革命」を加筆して掲載したからではないだろうか。

おわりに

コミンテルン創立大会最終日にリュトヘルスが日本からのメッセージを動議として提案したことは，日本社会主義者にとって恩義が感じられる行動であった。実は，この場面には「手書き要録」にだけ次のような記述がある[39]。

---

(35) “Japanese Socialists on the Bolsheviks,” *The Labour Leader,* Vol. 16, No. 4, 23.I.1919, 5.

(36) “Le Socialisme au Japon. L’action du Parti contre l’intervention en Russie,” *L’Humanité,* No. 5418, 16.II.1919, 3.

(37) “Jap Socialists Aid Bolsheviki. Party Fights Intervention in Siberia by Mikado’s Government－Leaders Seized,” *The New York Call,* Vol. 12, No. 82, 23.III.1919, 5.

(38) 片山潜「日本社会党の態度」『平民』20号，1919年5月；“Who are the Russian People?,” *The Heimin,* No. 21, VI.1919.

(39) Hedeler/Vatlin, *Die Weltpartei aus Moskau,* 37.「手書き要録」（S. 29–38）はヴァトリンら編集の議事録に初めて収録されており，会議全体の流れを見るのに重宝で，かつ正式な議事録にない記述も散見する。

同志プラッテン――雑件への議案〔作成〕委員会の報告者として：／1）〔略〕／2）次に申し出る機会にまたこの考えを表現するきっかけとなるために，リュトヘルスの決議案――日本共産主義者のインタナショナルへの入会に関して。事務局――提案する：賛成する

正確に読みとりにくい記述だが，日本の党の加入への実績作りをリュトヘルスは試みたことになるだろう。

肝心の日本社会主義者からのメッセージは，メイデー決議の方がロシア2月革命ではなく10月革命歓迎であるかのような決議として伝播したのであり，そのことは当時の日本社会主義者にとっては知る由もなかったろう。そのいち早い西欧への伝播にもまた，リュトヘルスの関与が推定される。

最後に，リュトヘルスが果たした役割に関する原の総評を引用しよう。「ともあれ，ラトガース（マ）というインタナショナルな活動家と巡り合うことがなかったならば，国際的に孤立していた日本の社会主義者が自国政府の干渉政策に対する抗議を国際的な場裡で表明する術もなかったであろう」[40]。

それには私も同感だが，それは決して一場面限りのものではない歴史的文脈があったことが，ヨリ重要であろう。つまり，1918年5月14日に訪日する前にリュトヘルスは，盟友関係にあった片山から日本の同志たちへの紹介状を得ていたのであり，横浜の吉田只次をかわきりに杉山，さらには東京の堺，山川らの知遇を得て，それを契機に横浜と東京で「最初の統一行動」が実現した[41]。創設されたコミンテルンは，モスクワを起点にいわば「西回り」と「東回り」で片山-リュトヘルス・ルートを通じて日本社会主義者と最初につながっていくことになる[42]。

（やまのうち・あきと　九州大学名誉教授）

(40)　原『シベリア出兵』，399.

(41)　山内『リュトヘルス』，273-275, 286；同「日本社会主義者とコミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの通信，1919-1920年」『大原社会問題研究所雑誌』499号，2000年6月，62-63.

(42)　Cf. 山内『初期コミンテルン』.